

ビデオ 通信

2015年
8月27日(木)
No.3910

月・木曜日発行
1ヶ月¥11,000(税別)
発行：飯澤剛 編集：齋藤浩一

ユニ通信社

〒106-0047
東京都港区南麻布 5-2-37
DEPECHE MODE 1F
TEL：03-5422-7515
FAX：03-5422-7516
E-mail：vt@uni-press.net

映学社

教育映像に特化した映像制作

全てが自主制作、クオリティの高い作品群
ワールドメディアフェスティバルで銀賞を受賞



WMFで銀賞を獲得した『最期の願い—どうする 自宅での看取り』

(株)映学社は、創業から一貫して教育映像の自主制作を続けている映像制作会社。年間50本という制作本数に加え、教育映像祭や科学技術映像祭、映文連アワードなどでは毎年受賞作品を連ねる高いクオリティの作品を作り続けており、今年の世界メディアフェスティバル(WMF・ドイツ)では『最期の願い—どうする 自宅での看取り』が銀賞を受賞した。これ

らの作品全ての企画を担当する代表取締役 制作統括プロデューサーの高木裕己氏は「自主制作は何の制約もなく作れるのが最大のメリット。制作者の思想や哲学を込め、“考えさせる”映像作りを心がけている」とする。同社では新法人「生涯学習支援機構」を設立、社会教育映像活用の場をさらに広げていくという。

設立のきっかけは阪神淡路大震災

映学社では現在、社会教育分野を中心に幅広いテーマの教育映像を手がけている。

高木裕己氏は、テレビ朝日映像(株)や東映(株)教育映像部などで教育映像の脚本・演出を担当した後、1995年に映学社を設立した。そのきっかけとなったのは、阪神淡路大震災における取材体験。取材現場で「何故、通電火災のことを教えなかったのか」「防災学習を徹底しなければ、日本は大変なことになる」と思い、防災学習に特化した会社を立ち上げようと考えた。

2011年3月11日の東日本大震災の被災地にも、いち早く取材に入っている。所属する日本市民安全学会や警察政



同社が注力する防災教育映画の最新作『深刻化する気象災害 どう身を守る？どう備える？』

策学会などのあらゆるネットワークを駆使して震災後すぐに陸上自衛隊のヘリが撮影した映像を入手し、関西大学 河田恵昭教授の監修で『まず逃げろ！高台へ！』（2011年）を制作した。その後、東日本大震災をテーマにした映像を多数制作。小学校中・高学年向けのアニメーション『ボクはすぐに逃げたんだ 東日本大震災から学んだこと』は2012年教育映像祭最優秀作品賞・文部科学大臣賞を受賞した。〈当時、河田教授と津波に対する警鐘を鳴らす映像の制作を進めており、津波に関してはCGで作ろうと考えていた矢先、東日本大震災が起き、実際に大津波が来てしまった。「これはCGでは通用しない。本物の映像を使わねば」と考え、急きょ取材を始めました〉（高木氏）

“自主制作”によるクオリティの高さ

映学社による教育映像の制作本数は、年間50本にのぼる。以前は35本のペースだったが、長いスパンで制作する作品が増えたことから、1年間で関わる作品数が年々増えてきているという。



最大の特徴は、これらの作品を全て自主制作していることだ。

高木氏は〈設立して約10年はスポンサー作品の方が多かったのですが、ある時「こんなことをしていても利益が出ない」と意識改革し、スポンサー作品を全て断り、全ての作品を自主制作することに決めました〉と振り返る。



小林綾子を起用したドラマ仕立ての交通安全教育映画『パパは風になった』

同社の作品は、教育映像祭や科学技術映像祭、映文連アワードなど、教育関連映像のアワードに毎年受賞作品を輩出するなど、クオリティの高さにも定評があるが、それも自主制作のメリットが活かされたものだという。

〈やはり“縛り”や“制約”がないからだと思います。同じテーマでも、制作者の思想や哲学を込めることで、より面白い作品になる。単に説明するだけでなく「映像で考えさせること」をコンセプトに制作しており、説得力のある映像にすることを心がけています〉

企画のポイントは一步先を行く“話題性”

創業以来、全ての作品は高木氏が企画する。最も心がけているのは一步先を行く“話題性”だ。〈様々な蓄積がなければ企画はできません。テーマを見つけ、過去の実績からその作品がどのように動いていくのかを見通しながら企画を立てていくことが必要です。また、“話題性”がなければ、生き生きとした作品ができません。学会などにおける情報収集や人脈によって、確実に一步先を行く企画のテーマを掴むことができます〉

企画を出し続けるためのモチベーションは、作品に対するフィードバックだという。〈作品に対して「こういう所が良かった」「もっと違ったカタチで表現して欲しい」などのフィードバックを得られる。これも自主制作にしたメリットの1つです。学校の講演会などでの「今の中



企画書をチェックする高木裕己氏

学生、高校生はこんなことを考えている」という生の声が次のステップにつながっていきます)

制作の現場は、契約スタッフが中心となって進められていく。現在、8 班が同時に進行しているという。(人権問題など) デリケートなテーマの作品では、高木氏が監督を手がける時もある。企画が固まると、そのジャンルに強い演出家・脚本家と相談しながら構成案を固め、監修者から色々な話を聞きながらシナリオを起こす。シナリオが固まったら撮影に入り、編集したものを監修者がチェックする。図解や CG、簡単なアニメーションを含め、録音の前段階までは全て自社で作業を行っている。早いものでは 3 ヶ月、長いものでは 1～2 年かけて 1 つの作品を作り上げるという。なお、同社が入居するビルには専用の編集室を有している。

『最期の願い』が WMF で銀賞を受賞



同社が制作した『最期の願い—どうする 自宅での看取り』が、今年のワールドメディアフェスティバル 2015 で銀賞を受賞し、高木氏は 5 月 6 日にドイツ・ハンブルクで行われた受賞式に参加した(←写真)。

〈現地で話を聞くと、団塊の世代のほとんどが 75 歳になる 2025 年問題も含め、日本が超高齢化社会をいかに乗り越えていくのかに対して、非常に関心が高いことがよくわかりました〉(高木氏)

『最期の願い』は、医療従事者や一般向けにスピリチュアルケア(心・魂のケア)やクオリティ・オブ・ライフ(生活・生命の質)のあり方を理解してもらう目的で制作したもの。岐阜県養老町で在宅医療を支える船戸クリニックの活動を捉え、尊厳のある生き方・死に方とは何かを考えていく作品。約 45 時間にのぼる撮影素材から、25 分の作品に仕上げた最大のキーワードは「励まし」だ。

〈ターミナルケア(終末期医療・看護)やホスピスに携わる人々が一番悩まされるのが「私は助かるのか?」「生きていけるのか?」といった質問。ターミナルケアですからみんな覚悟はしているけど、励ましてもらいたい。その「励まし」を軸に制作しました。現場の人達が一生懸命になれるのは、患者さんの心は病気になっていないから。「人間の心は病気にならない」がターミナルケアの救いです。「明日もまだ生きたい」というチカラにみんなが励まされる〉



『最期の願い—どうする 自宅での看取り』

最も苦労したのは、被写体となってくれるモデル探し。船戸クリニックの船戸崇史院長に協力を仰いだが、何件も断られ続けて諦めかけた 1 年後、取材を受けてくれる家族が現れたという。約半年間にわたって週に一度、岐阜県に通って、船戸医師の往診に同行し、取材を行った。在宅ケアの現場は非常に狭く、演出の高木氏とカメラマンの 2 人体制で取材を進めたという。

中学生の人権作文を映像化

また、法務省主催「全国中学生人権作文コンテスト」の大臣賞受賞作品の映像化を進めている。〈これまで色々資料を探して映像を作ってきましたが、このコンテストは「中学生は今、何を考えているのか」という生の声を聞くことができます〉(高木氏) (次ページに続く)

シニア世代の生涯学習の場を広げる新法人を設立

同社は今年、「一般社団法人 生涯学習支援機構」を立ち上げた。

代表を務める高木氏は「最大の目的は、今、生涯学習を支えているシニア世代の人達に生涯学習の場を提供すること。当社の作品は公費で購入してもらおうので価格設定が高く、シニア世代には購入できないとの声を数多くいただいています。当社として貸出はできませんから、講演や映像の貸出などを行う新法人の設立により、社会教育映像を活用する場を広げていきたい」としている。

これまでに『悩まずアタック！ 脱・いじめのスパイラル』（2014年）と『こんにちは 金泰九（キムテグ）さん ハンセン病問題から学んだこと』（2015年）の2作品を制作。現在、今年の法務大臣賞「戦争を次世代へ伝えて」と、内閣総理大臣賞「被害者と加害者 それぞれの立場」の制作が進められている。「被害者と加害者 それぞれの立場」は、さだまさしの『償い』という曲を起用したドラマになる予定だ。

「長編への挑戦」も

また、「長編への挑戦」を目標に掲げている。

『最期の願い』を再編集し、約1時間の長編作品（ディレクターズカット版）として完成させるほか、『こんにちは 金泰九（キムテグ）さん ハンセン病問題から学んだこと』で約1年間取材した、ハンセン病患者のために岡山県・長島愛生園に開設された「新良田教室」をテーマとした長編作品の企画を進めているという。

さらに、テーマが世界共通の作品については外国語版を制作していくなど、海外展開も進めていく考えだ。「海外でも日本の情報を知りたいがっています。映画祭などをベースにしなが海外との情報交換していきたい」（高木氏）

注目していきたいテーマは「死の医学」



高木裕己氏

今後注目していきたいテーマとして「死の医学」を挙げる高木氏。「ターミナルケアの人達からは「これまで、生きることに対しては一杯勉強してきたけど、何故、死に対する勉強をしてこなかったのだろう」という声を多く聞きます。日本は「死の医学」に関して、先進国と比べて非常に遅れている。日本はこの70年間、幸いにして戦争がなかったため、死に直面していません。でも、これから迎えるであろう“多死社会”においては、スピリチュアルケアや残された人達の悲しみのケア（グリーフケア）がさらに重要になってきます。また、地震や災害

における臨床宗教師の存在など「死と祈り」の問題が増えていくのではないかと話している。

◇映学社 <http://www.eigakusya.co.jp/>

東京都新宿区新宿 5-7-8 らんざん 5ビル TEL03-3359-9729